

機関番号：13101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19530790

研究課題名（和文） 教員養成カリキュラム開発のための授業力育成に関する基礎研究

研究課題名（英文） A study of teaching skills in a curriculum to be developed for student Teachers.

研究代表者

高木 幸子（TAKAGI SACHIKO）

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：70377175

研究成果の概要（和文）：

教員養成カリキュラムを開発するための基礎研究として、教育実習授業及び勤務校での授業（計 24 授業）を対象に授業実践力の変容を把握する方法を検討した。その結果、教授・学習行動、発話分類、教材（ワークシート）に注目することで授業実践力の変容を把握できるという知見を得た。また、教員養成カリキュラムに、この方法論を組み込み、授業経験と省察、課題を認識する機会を設定することの重要性を確認した。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this paper is to clarify methods of teaching ability analysis. For setting student teacher training curriculum, 24 lesson plans and video records were analyzed. As a result, three frames (teaching and learning activities, words, work-sheets) were able to classify the improvement of teaching abilities. So, it is important that the training curriculum contains the lesson teaching experience, reflection, cognition of problem.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	300,000	90,000	390,000
2010 年度	200,000	60,000	260,000
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

専門分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：カリキュラム構成・開発 授業実践力

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の背景と着想に至った経緯

社会的要請

社会の変化が著しい中で、それぞれの職業に求められている力やその基礎となる知識・技術を提供することは重要である。とり

わけ小中高等学校教員の養成においても、学士段階で教員に必要とされる必要最小限の力を養成することが求められており、中でも必要とされる中核の力の一つである授業指導力を持った学生の養成を期待する声はますます大きくなってきている。

教養審（第一次答申）（1997）に示されているように、大学の教員養成段階において

「教科指導、生徒指導等に関する「最小限必要な資質能力」や、課題探求能力を身につけることができる授業を行うことは重要性である。そして、その方法として、「実習」という形で、授業実践や児童生徒の対応に学び、その状況の中で省察できる実践の場を準備することとともに、教材の本質的理解の基礎や教材解釈の方法論、子どもの心理や思考様式、授業の構造等を学び、授業の方法論を体得するために、学生が自ら実践し、課題に気づき、また、課題解決の糸口を求めていける授業課程を組むことなどが示されている。

以上の指摘や現在の学校教育現場の現状を考えると、今後の教員養成にはこれまで以上に即戦力として通用する力量が求められていると考えられる。その意味でも、教員として採用された後の学生にとって、先述した「実習」や「模擬授業」などによる経験知が、教員生活の糧となっているのか検討し、その視点にたって養成カリキュラムの内容や視点を見直すなど養成段階のカリキュラムを採用後とのつながりから見直すことが必要であると考えられる。

採用後を視野に入れて養成段階の内容を検討することの必要性

研究代表者は、2004年度から現所属研究機関の教員となり教員養成に関わる機会を得た。そして、自身の教員経験を踏まえて養成段階での授業実践力の育成を目的に、3年次の学生を対象とした教育法の科目において、授業を構想し模擬授業経験を組み込んだ授業プログラムを試行し、教員に必要な教授技術等の習得、家庭科授業への理解の状況を実践的に検討してきた。

そこでは、学生は実際に模擬授業を行うことで、自分に知識や技術が不足していることを理解し、教材研究の重要性を認識していた。また、家庭科授業について、授業を構想・展開する際の課題や課題を改善するための方策を検討し、家庭科授業のありようを考える契機としていることを知見として得ていた。また、学生だけの力で複数時間の授業を構想し実践する「研究教育実習」の経験を通じて、題材全体の目標を達成させるために、各時間の果たす役割や各時間のつながりを児童生徒の思考にあわせる必要性に気付いていた。さらに、卒業研究の実践的検証の場として学校教育現場での授業実践を経験した4年次生は、児童生徒と継続して関わりながら授業の流れを修正していくことの必要性を理解するとともに、児童生徒との対応のあり方を現職教員の対応から学んでいた。

以上、学生の授業実践による成長について検討する中で、養成段階の経験により得た力が、実際の教育現場で活用できる力となり得

ているか否か検討するために、養成段階から採用後を通して考える視点が必要である。

2. 研究の目的

そこで、本研究は、教育法プログラム、研究教育実習等で授業を行う経験をした学生が、教員採用後、授業の構想・実践をどのように行っているのか、また、改善しているのか等を追跡し、養成段階で押さえるべき内容を検討するための基礎資料を得ることを目的とする。

3. 研究の方法

そのため、はじめて授業を行う段階（3年次春期教育実習）から卒業後2年程度を経た勤務校での授業の具体について、継続して変容が検討できる記録をとり、授業構成や児童生徒対応に関わる意志決定について聞き取る。そして、この期間に見られる変容に注目し、データを基に教員養成カリキュラムに含むべき内容や要素を検討する。

具体的には次のようにすすめる。研究1年目は、教科指導を中心として小中学校教員が行う主な職務を洗い出したうえで、授業場面を中心として養成から採用後を通じて追跡する観点を設定する。また、3年次、4年次生で経験する模擬授業や教育実習の授業を記録するとともに、追跡対象者の勤務校に赴き、授業を観察・記録し聞き取りを行う。

研究2年目、3年目は、1年目と同様に、教育実習授業の記録及び追跡対象とする教員の授業を観察・記録する。そして、得られたデータの分析を基に、養成段階での授業力の向上をとらえる枠組みの整理と授業実践力の向上を把握する方法について検討する。

なお、4年目も、授業分析データに基づき考察・検討をすすめ、追跡対象者の大学3年次からの授業記録を比較・検討する。また、変容の方向性が教師としての成長の方向であるか否かを確認するために、外部評価で高い授業力を認められている教員の授業についても同様の方法で分析し、比較・検討する。これらの検討を踏まえ、養成段階カリキュラムに含む内容案を抽出・整理する。

4. 研究成果

研究計画の段階では養成段階での授業記録を保持できる13名の分析対象者を想定していたが、卒業時の採用状況や勤務校での状況により継続して授業記録を保持できた8名（授業記録データとしては24授業）のデータを中心に分析を行った。また、研究をすすめる中で授業力の変容を確かめるために、高い授業力を認められている教員の授業（6

授業)についても分析し参考資料として用いた。

分析の結果を踏まえ、授業実践力の向上として把握する枠組みに関する成果と、教員養成カリキュラムの内容に関する成果をまとめ示す。

(1) 授業実践力の変容を把握する枠組みに関する成果

教授・学習行動の分類

授業のビデオ記録で観察できる教授行動を4分類、学習行動を5分類して、かけられた時間の割合や授業の流れに伴う行動の切り替えを分析した結果、調理実習など児童生徒の活動が中心の授業では、教授行動・学習行動ともよく似た時間の割合を示した。この結果に関して、限られた時間の中で行うべき内容は大凡決まっている。例えば調理実習であれば、実習を行う料理の手順の確認とポイントの説明をし、その後は、実習・試食と片付けを時間内に終わるよう支援する必要がある。すなわち、こういった児童生徒の実習を伴う授業では、それぞれの内容を効率化するために指導過程がパターン化される傾向が認められており、それが良く似た時間の割合を示した要因になったと推察する。

また、勤務校での授業は、教授行動の切り替えが頻繁で複数の行動を同時に行っている傾向がみられた。これは、授業の展開場面での即時的な対応がより多く行えていることの表れと推察する。

以上のように、教授・学習行動を上述の枠組みで分類することで授業実践力の変容を把握することが可能であることがわかった。

発話の分類

授業場面において教師や児童生徒の用いる言葉を分析的に把握するために、北尾らが示している教師の言葉を6分類、児童生徒の言葉を7分類する枠組みを適用して分析を行った。

教育実習で行われた16授業のうち、調理実習など活動を中心とする授業を除く12授業は、教科・学年や学習内容、実施時期など、全てが異なっていた。しかし、それにも関わらず教師の指示・発問・説明など言葉を用いた指導にかけられている時間の割合は全体の約半分(46%~62%)を占めていた。この結果が、養成段階に認められる一般的な傾向であれば、教師の用いる言葉の内容や分かりやすさの重要性を養成段階で意識する内容として組み入れる必要があると考えられた。

この点について、高い授業力を認められた教員の授業を分析した結果と比較すると、教員の授業の方が、この割合は若干小さくなっていると思われた。その理由としては、教師の言葉による指導が少なくなっているの

はなく言葉以外の支援が頻繁に行われており、そのため総体的に小さい値になったことが推察された。

以上の結果から、発話を分類する枠組みは授業実践力を把握する枠組みとして適用できることを確認した。また、教師の用いる言葉の重要性が改めて確認できたことから教員養成段階のカリキュラムでは、学生自身が自分の用いる言葉に注目できるような機会が必要であると考えられた。

ワークシート・印刷教材の分類

ワークシートや配布資料、提示資料など、授業場面で用いられる教材について、授業実践の力量形成との関連を検討する枠組みを設定した。ワークシートについては、準備された欄に記述する際に求められる児童生徒の思考の程度により4段階を設けた。それ以外の教材については、授業場面で果たす代表的な役割を5つ想定し分類を試みた。

ワークシートに関しては、3年次春期教育実習の授業では、ワークシートの多くの部分が、板書を写す、または、実験結果などをそのまま書くために用いられていた。秋期教育実習では、結果をそのまま書くだけでなく、考察を加えたり自分の意見を記入したりする記入欄が多くの授業で設定できていた。さらに、卒業後の勤務校での授業では、子どもに自分の考えを整理させたり応用問題に挑戦させたりするための記入欄を準備していた。

一方、印刷教材に注目すると、春期教育実習の授業では時間短縮や効率を上げること、秋期教育実習では、授業の重点や要点を示すこと、勤務校では学習目標の達成を支援することのために多く用いられていることが分かった。これらの教材は、授業者自身を助けるためのものから、児童生徒の学習を支援するものに移行する傾向がみられた。しかし、実物教材や視聴覚教材など、その種類によって異なる傾向があることも分かった。

教材のありようは多様であり、全ての教材を明確に区別して分類することは難しい。実際に具体的な教材を適用して分類すると多様さは明らかであった。しかし、子どもに対して果たされる役割や子どもに求める思考の深さの視点から分類の枠組みを設定することで、授業場面で用いられている教材の一部については教師としての成長の視点から把握することが可能であると推察された。

授業場面で観察可能な材料をもとに、教師としての成長を分類できる枠組みを設定することで、授業実践の事実を対象に、自分の授業の課題や傾向を客体化して理解することが可能であることを知見として得ている。把握する枠組みや質の良否を判断する基準などについては、今後も繰り返し見直しを行

う必要があるが、本研究の結果を踏まえれば、ワークシートを把握する枠組みは、適用可能であると考えられる。

(2) 教員養成カリキュラムに含む内容に関する成果

本研究は、養成段階の教育実習授業でとらえることのできる授業実践データを主な分析対象としているが、分析対象者は教育実習に赴く前提として教科教育法などの科目を受講する。これらの経験と(1)で整理した授業実践力の変容をとらえる枠組みに関する成果等を関連させると、次の点への留意が必要であることが知見として整理できる。

「授業実践を振り返る機会の設定

本研究で共通の枠組みを設定し授業実践の具体的事例を重ねて検討した。そこでは、授業実践の経験を積む中で「教師中心の考え方から子ども中心の考え方」への移行という、先行研究で指摘されている傾向を具体的な授業データとして確認することができた。またこの変容には、行った授業の何が良かったのか、また、何が課題となっているのかについて「振り返り(省察)」を行うことの重要性が示唆された。このことから、これらの内容は教員養成カリキュラムの内容として保証する必要がある。すなわち、教育実習という児童生徒への直接的な授業経験の機会を単なる経験に終わらせない振り返りの場を設定することが重要である。

目標設定と相互交流の機会の設定

8名の学生の授業の分析を通じて、授業の構想や準備、あるいは展開の場面で授業スタイルとでも言うべき授業者固有の傾向がうかがえた。また、授業実践力の向上は個人によっても異なる様子が確認された。この結果を踏まえると、教員養成カリキュラムには、授業実践の実現にかかわる指標を提示して意識化することや養成段階で行う模擬授業等の場面で相互に意見交換をして、自分の見え方を確かめ精練する機会を設定することが重要であると言える。

なお、本研究の1年目、2年目に収集・分析した教育実習授業の中には、養成から採用後の授業実践力の成長を分析するために用いた対象授業(24授業)として用いなかった授業記録も存在する。これらの授業分析データについては、今後、授業実践力の向上を検討する新たな機会での活用を検討していきたいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

1 高木幸子, 教育実習生の家庭科授業にみられる授業実践力の分析 調理実習にお

ける教授・学習行動に注目して - , 日本家庭科教育学会誌 53 (4), 2011, 238-245, (査読有)

2 高木幸子, 教材の役割変容からとらえる授業実践力の向上: 教育実習生から教師への成長, 教材学研究第21巻, 2010, 111-120 (査読有)

3 高木幸子, 養成段階において家庭科授業作りを支援する指導用資料の検討-「家庭科授業が分かる・できる・見える」-, 新潟大学教育学部研究紀要第2巻第2号(人文・社会科学編), 2010, 227-240(査読無)

4 高木幸子, 授業実践力の向上についての分析: 教育実習生から教師への成長, 教材学研究第20巻, 2009, 39-50(査読有)

5 高木幸子, 授業構造に着目した家庭科教員養成プログラムの開発, 家庭科教育学会誌第51巻4号, 2009, 291-301(査読有)

6 高木幸子, 教育実習とつないで授業実践に必要な知識技術の理解を深める実践参加型授業の試み, 大学教育研究年報, 13. 新潟大学, 大学教育開発研究センター編, 2009, 9-12(査読無)

〔学会発表〕(計3件)

1 高木幸子, 授業実践力の向上についての分析: 教育実習生から教師への成長, 日本教材学第21回研究発表大会, 日本大学, 2010年10月17日

2 高木幸子, 教育実習生の家庭科授業における授業実践力についての分析, 日本家庭科教育学会第52回大会研究発表, 北海道教育大学(札幌校), 2010年6月28日

3 高木幸子, 授業場面における学習者・教材・教師間の相互作用の分析」教育実習と勤務校での授業の比較, 日本教材学会第20回研究発表大会, 成蹊大学, 2008年11月9日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高木 幸子(タカギ サチコ)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号: 70377175

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし